

# 地域連携・国際センター一年報

# I 認定看護管理者教育課程（セカンドレベル）報告

## 1 セカンドレベル実施概要

2018年度は、セカンドレベルの教育課程を開講した。

(1) 日程：第1クール 2018年6月18日（月）～6月29日（金）

第2クール 2018年7月9日（月）～7月27日（金）

第3クール 2018年8月29日（水）～9月7日（金）

(2) 受講者 37名（県内 34名、県外 3名）

（看護部長職 2名、副看護部長職 4名、看護師長職 27名、主任看護師職 4名）

(3) 内容：

- ・カリキュラムは、「看護組織管理論」、「人的資源活用論」、「ヘルスケアサービス管理論」、「医療経済論」、「統合演習」の5つの教科目からなる。時間数は規定の180時間のほかに、コースガイダンス、ヒューマンネットワーキング、図書オリエンテーション、レポートの書き方、プレゼンテーション等12時間を加え、計192時間であった。
- ・講師は、県内外の専門分野の教育・研究・実践者が担当し、学内教員の協力も得た。
- ・学習方法は、成人学習者として主体的に展開することを目指し、講義、演習、プレゼンテーションにより構成した。

## 2 セカンドレベルフォローアップ研修

(1) 目的：自らが立案した組織の改善計画の実施を推進するとともに、セカンドレベル修了者の看護管理実践能力の向上を目的とする。

(2) 内容：セカンドレベル終了後の実践状況報告及びコンサルテーション

(3) 開催日時：2019年3月9日（土）9:30～17:30

(4) 場所：青森県立保健大学 C棟2階 N講義室1

(5) 参加者：平成30年度セカンドレベル修了者 31名、演習支援者 11名（教員2名を含む）、専任教員 1名、受講者所属機関関係者 10名 計 53名

## Ⅱ 研修科事業報告

### 2018年度の研修科事業の概要

#### 1 公開シンポジウム「第18回地域包括ケア・フォーラム in 青森」

##### 1 企画の背景

本フォーラムは、2001年に下北地域の保健医療福祉専門職と共同で「ケア・マネジメントフォーラム in 下北」と題し企画開催された。翌年からは、「ケア・マネジメントフォーラム」の名称を用いて毎年開催を重ね、平成26年度からは「地域包括ケア・フォーラム in 青森」として開催し、これまで広く県下の保健医療福祉専門職、当事者・家族、本学教職員・学生の参加を得ている。これまで高齢者虐待・利用者が望むケアプラン・地域におけるすこやか力向上・がん患者のためのサバイバーシップ等、地域のニーズに対応した多岐にわたるテーマで開催している。

##### 2 研修目的

第18回は、「日常生活上のケアをする」という基本に戻り、中でも”排泄ケア”に着目した。私たちが生活する上で不可欠な行動であり、重要なテーマである。自立もしくは何らかの介助が必要な方、ご家族の方、医療従事者、ケアを学んでいる学生等、誰しもが適切なケア方法を模索し、苦心し、継続している。単にきれいにするだけでなく、工夫・考え次第で援助される方々の行動範囲が広がったり、排泄に関するストレスが軽減したり、またケアを行う側の満足度も向上することが期待される。そこで、排泄という機能を身体の仕組みから復習し、広く実践されているケア方法の根拠を学び、日々のケア方法がより効果的なものになるための工夫を得る機会としたい。

##### 3 研修受講者

県内保健医療福祉専門職、本学教員、本学学部生・院生：203名

##### 4 開催日時および場所

2018年11月26日（月）13:00～16:00

青森県立保健大学 A棟1階A101教室

##### 5 研修内容

###### 1) 基調講演 テーマ：「身体の働きからみる排泄を調えることの重要性」

講師：三重県立看護大学 学長 菱沼 典子氏

###### 2) シンポジウム「多様な排泄ケアの根拠を探る」

司会：青森県立保健大学 看護学科（研修科長）鄭 佳紅

シンポジスト

人間環境大学 看護学部 栗田 愛氏

山形済生病院 リハビリテーション科 坂本 優捺氏

八戸市立市民病院 看護局 河村 舞氏

###### 3) ディスカッション

##### 6 研修の成果および評価

研修会終了後、アンケート調査を実施した。参加者203人のうち、159人（回収率78%）から回答をいただいた（詳細はアンケート結果参照）。基調講演の満足度は、「満足した」45%、「概ね満足した」46%、シンポジウム・ディスカッションの満足度は「満足した」26%、「概ね満足した」52%であった。今後の職務に「大いに役に立つ」42%、「少しは役に立つ」47%で研修会の評価は概ね良好であった。



基調講演（三重県立看護大学長 菱沼典子氏）



シンポジウムの風景

## 2 研修企画・実施助成事業

県内の保健医療福祉専門職を対象とした研修企画を募集し、助成を行った。採択された研修企画・実施助成については事業実績報告書参照のこと。

## 3 認定看護師フォローアップセミナー

- (1) 目的：認定看護師の役割を振り返ることや自己研鑽のため
- (2) 対象者：救急看護認定看護師（本学課程修了者）26名
- (3) 開催日時：2019年3月16日（土）10:00～16:00
- (4) 場所：青森県立保健大学 A棟1階A107教室
- (5) 内容：【セミナー①】「急変させない！患者観察テクニック」  
【セミナー②】「救急看護認定看護師のこれから一方向性を考える」
- (6) 講師：神戸大学医学部附属病院 看護部  
平尾 明美氏（急性・重症患者看護専門看護師／救急看護認定看護師）

## 訪問看護師の実践力・実習指導力アップ研修（基礎編）

細川 満子<sup>1)</sup>、坂田 千佳子<sup>2)</sup>、松尾 泉<sup>1)</sup>、山本 明子<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学健康科学部看護学科、2) 公済会訪問看護ステーションやまびこ

### 1. 企画の背景

在宅看護において、その対象を疾患や障害を有している生活者としてとらえ、その人の価値観や目指したい生活を営むことができるように目標指向型の看護が求められる。そこで看護展開のパラダイムシフトが可能な国際生活機能分類（International Classification of Functioning；以下ICF）の概念を看護実践や実習指導へし、在宅看護の質の向上を目指したいと考え、2017年度青森県立保健大学研修企画・実施助成を受けて研修会を開催した。研修後、参加者からのアンケートにおいて看護実践へ活用したいと意向を示した者が9割を占めたことから、今年度は訪問看護の実践および実習指導への適用方法について理解できることを目指して研修会を開催した。

### 2. 研修目的

本研修は2017年度の研修で学んだICFの基本的な知識をもとに、事例を通して訪問看護計画への適用方法について理解することを目的とした。

### 3. 研修受講者

職種：青森県内の訪問看護事業者に勤務する看護師

受講者数：修了者数 37 人

### 4. 開催日時および場所

	開催日	会場
1	2018年9月22日（土）	公済会館（むつ市小川町1-1-5）
2	2018年11月17日（土）	八戸市医師会交流センター（八戸市柏崎六丁目26-1）
3	2018年12月1日（土）	青森県立保健大学（青森市浜館字間瀬58-1）

### 5. 研修内容

#### 1) ICFの動向と概要について（講義）

講師：細川 満子（むつ会場、青森会場）、松尾 泉（八戸会場）

#### 2) 訪問看護過程へのICFの導入するための方法（講義）講師：細川 満子

#### 3) 事例を通してICFの導入方法を理解する（グループワーク）

ファシリテーター：坂田千佳子、松尾 泉、山本 明子、細川 満子

#### 4) グループワーク結果についてプレゼンテーション、意見交換

#### 5) まとめ・アンケート実施 細川 満子

#### 6) 研修報告書作成

### 6. 研修の成果および評価

参加目的の達成度について、「できた」、「概ねできた」はむつ参加者は100%、八戸75%、青森86%であった。また今後の職務に役立つかは、「大いに役立つ」はむつ参加者80%、八戸62%、青森57%と、むつ参加者が研修会への満足度が高かったことがうかがわれた。参加者数は予定より少なかったが、ICFの活用方法について理解を深めたいという意見が出され、多様な事例へ適用できるように継続研修の必要性が示唆された。

## 2018 年度「医療通訳養成研修Ⅱ」

川内規会<sup>1)</sup> 小笠原メリッサ<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学

### 1. 企画の背景

2013 年より県内の医療者やボランティア通訳者、医療現場で通訳を経験した人等を対象に「医療通訳養成研修」を実施してきた。昨年度 5 年目を迎えるにあたり、今までの医療通訳研修修了者をはじめとし、医療者や通訳者を対象にステップアップした「医療通訳養成研修Ⅱ」を企画した。参加者から好評であり継続的な実施が期待されていたことから、今年も同レベルの研修を企画した。県内のボランティア通訳の現状と課題を共有し、医療現場で通訳できる人材の養成を目指し、第一線で活躍中の医療通訳者と公衆衛生・地域医療に従事する医師を講師に迎え開催した。

### 2. 研修目的

青森県の医療現場で活躍できる通訳者を養成することが目的である。一般的な通訳業務と異なり医療という専門的な分野では、語学力以外にも医療分野の知識、通訳技術、倫理など多くの視点が必要になることを確認してもらい、実際の医療の現場で、外国人患者と医療者の双方を助けるべく、通訳業務が円滑に実践できる力をつけてもらうことを目指している。

### 3. 研修受講者

受講者：医療関係者（看護師、助産師、薬剤師、理学療法士）、社会福祉士、  
教育関係者（英会話塾、日本語教育）ボランティア通訳者（青森市ボラン  
ティア通訳、県国際交流協会ボランティア通訳）国際交流協会職員、その他  
受講者数：24 人（2 日間のべ参加者 44 人）

### 4. 開催日時および場所

日時：2018 年 11 月 10 日、11 日 10:00～16:30

場所：青森県立保健大学 A 棟 1 F 107 教室

### 5. 研修内容

研修講師：アビー・ニコラス・フリュー（多言語社会リソースかながわ医療通訳者）

矢野亮佑（青森県三戸地方保健所保健医長）

川内規会（青森県立保健大学准教授）

講義内容：日本の医療通訳の概要、医療現場の現状と心構え、医療通訳倫理と最新情報

演習内容：通訳技術（クイックレスポンス、ノートテイキング）、通訳実践、ロールプレイ

グループワーク：体験の共有、継続的学習の方法

### 6. 研修の成果および評価

研修参加者アンケート（22 名）では、【1. 参加目的の達成度】の平均は 4.5 で、研修内容を理解し、新しい知識や視点、自身の課題に気づくことができた」と評価された。【2. 今後職務に役立つか】では平均 4.8 で、医療者やボランティアで実践している通訳者と思われる回答は特に高評価であった。また「自身の用語不足・知識不足に気づいた」という回答や「技術のみならず多様性・弾力性が身に着いた」など変化を感じとった回答も多かった。【3. 意見・感想】では、「今後も研修を続けてほしい」「次回も参加したい」「回数や時間を増やしてほしい」という声が多く、継続的な開催が期待されていることがわかる。知識や心構えを学んだ上で実践練習ができるような研修を今後も企画していきたい。

## 高齢者のスキンケア（基礎編）—皮膚の加齢変化をふまえて—

長内志津子<sup>1)</sup>、木村ゆかり<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学

### 1. 企画の背景

高齢者の皮膚は、皮膚の加齢変化により皮膚損傷リスクが高まるうえ、一度損傷を受けると治癒しにくい。病院や介護老人保健施設（以下施設）で療養する高齢者は特に皮膚損傷のリスクが高く、「ドライスキン」「スキンケア（皮膚裂傷）」「失禁関連皮膚障害（IAD）」「褥瘡」を生じやすい。療養中の高齢者は自分自身でスキンケアを実施することは困難であることが多く、専門職者がセルフケアを代行しているのが実際である。また、スキンケアは日常生活援助と密接であり、多職種が援助に関連している。高齢者に関わる各専門職者が加齢変化をふまえた基本的スキンケアを理解することは、スキンケアを日常生活援助で実施することにつながり、高齢者の皮膚損傷・皮膚トラブルを予防することに貢献できると考えた。

### 2. 研修目的

病院・施設の専門職者（看護職、介護職、リハビリテーション職）が、高齢者の皮膚に関する基本的知識とスキンケアの方法を講義・演習を通して修得することを目的とした。

### 3. 研修受講者

職種：看護師、准看護師、介護福祉士、看護助手、その他対人援助職者

受講者数 145 人、修了者数 135 人

### 4. 開催日時および場所

あおもり協立病院：2018 年 9 月 5 日・26 日 17：30～19：00

みちのく青海荘：2018 年 9 月 11 日・27 日 17：00～18：30

青森慈恵会病院：2018 年 12 月 12 日・20 日 17：15～18：45

### 5. 研修内容

講義（40 分）①皮膚の構造と働き、②高齢者に生じやすい皮膚トラブルとメカニズム

演習（45 分）①スキンケアの意味と種類、②テープ類の貼付・はがし方、

③保湿剤の塗布方法

まとめ、アンケート（5 分）

講義・まとめ担当：長内、演習担当：長内、木村

### 6. 研修の成果および評価

研修修了者 135 名の内訳は、看護師 41%、准看護師 8%、介護福祉士 30%、看護助手 12%、その他対人援助職者 19%である。研修後アンケートでは 128 名（95%）が、研修目的を「達成できた」「概ね達成できた」と回答した。理由として「メカニズムの説明と実践があったのでわかりやすかった」「対象者は 80～90 歳代の方がほとんどで、おむつ使用・水虫の方も多。悩んでいたのでケアについてよくわかりました」「スキンケア用品（保湿剤・洗浄剤）の選び方や実践方法が理解できた」が挙げられた。病院・施設責任者への聞き取りで、「多職種が日常的に保湿を行うようになった」「家族に説明できるようになった」「売店にも保湿剤を置いてもらえるよう、交渉中である」との回答があり、個人・組織レベルで研修内容の実践につながった。責任者からは「今回の研修をもっと多くのスタッフに受けてほしい」、修了者からは「スキンケア」「他の皮膚症状」のケア、「スキンケア用品の特徴」を知りたいという意見があり、基礎編に加えて専門的な内容の研修が期待されることがうかがわれた。

# カウンセリングの新展開としてのフォーカシングと対人援助スキルの向上—インタラクティブ・フォーカシングの体験的理解（初・中級編及び上級編）—

企画提案・実施者 岡田敦史<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学

## 1. 企画の背景

「フォーカシング」は、クライアント中心療法から発展した「カウンセリング」の中核概念であり技法である。現在世界的にも注目されている心理支援法であり、円滑な対人関係を形成するために、看護・社会福祉・教育等の基本的援助技術に取り入れることができる。また援助者のセルフケアとしても効果がある。その上様々な領域で活躍する対人援助専門職同士の協働を促進することもできる。

H28年度は対人援助職のセルフケアの視点から「入門編」を実施した。続いて、H29年度は「中級編」として実施した。参加者アンケートからもぜひ「上級編」を開催してほしいとの要望も多かった。加えて、新たに、学生や子育て中の保護者からも参加希望が多く寄せられ、初級から中級編の開催も期待されている。

## 2. 研修目的

保健・医療・福祉・教育等の専門職に要求される対人援助スキルとして、フォーカシングを学習する。また、セルフケアスキルとしてのフォーカシングを身につけることや、フォーカシングを活用して対人援助職の協働を促進する能力を身につけることが目的である。今回はH29年度の「中級編」修了者の要望に応えるために、「上級編」を開催し、更なる技法習得につながる内容とする。加えて、学生や子育て中の保護者からの参加希望に応えるために、再度「初・中級編」も開催する。

## 3. 研修受講者

職種： 児童相談所職員・青森県庁職員・児童福祉施設園長・スクールカウンセラー・中学校教員・県警臨床心理士・県立病院臨床心理士・ソーシャルワーカー・産業カウンセラー・家庭支援専門相談員・県立保健大学社会福祉学科学生など

受講者数：修了者数 58人（のべ参加者数 93人）

## 4. 開催日時および場所

2018年11月4日～11月5日 青森県立保健大学B棟110教室

## 5. 研修内容

初めてフォーカシングを学習する初級者から、さまざま相談活動にすでにフォーカシングをつ要する専門家を対象に外部講師（前田満寿美氏、伊藤三枝子氏）によるインタラクティブ・フォーカシングについて講義とデモンストレーションをおこなった。その後、小グループに別れ、両講師の指導のもと、ワークショップ形式による体験的学習を行った。

## 6. 研修の成果および評価

初級から上級まで、幅広い内容をコンパクトにまとめ、参加者全員が体験学習に参加し、効率的にカウンセリングの基礎および、発展型であるインタラクティブ・フォーカシングを広く、深く理解することができた。実施後のアンケートによる自由記述をみると、研修会参加より新たに知識・技術を習得したことに加え、今後の職務や日常生活に繋がる活力を得たことも表明され、多様な参加者それぞれにおいて、研修会が有意義であったことが示されている。

## 7. その他（改善検討事項、特記事項など）

特になし



# いきいきと生活するために-難病とともに歩む- 新版

川口 徹<sup>1)</sup>

1) 青森県立保健大学健康科学部理学療法学科

## 1. 要旨

このブックレットは、パーキンソン病、脊髄小脳変性症および他系統萎縮症などの神経難病に苦しむ人に対して、日常生活の過ごし方、運動の仕方、身体の動かし方、安全な運動方法などの生活指導を中心とした内容をまとめた小冊子である。上記のような難病患者への生活指導をより円滑にし、生活をしていくための手元に置けるような冊子を作成するために平成 22 年に当該ブックレット事業に企画申請し、600 部作製した。

その後、パーキンソン病、脊髄小脳変性症および他系統萎縮症者は患者会を設立し、本申請者はこれらの神経難病者に対し注意すべき点などを中心に、毎年数回にわたり指導してきており、さらに、青森県内の保健所から医療相談会などを頼まれ、指導する機会があり、作成したブックレットを活用してきた。

一昨年にはボンブックレットが数冊になり、ブックレット増刷を望む声が多く、時代に合わせて修正し改訂とし、新版として作成したものである。

## 2. 冊子の体裁

A4 判、18 ページでオールカラー印刷とした。文字数を大きくし、1 ページの情報量を少なくして、高齢障がい者が見やすく使いやすいように工夫した。

## 3. 活用方法

パーキンソン病、脊髄小脳変性症および他系統萎縮症といった神経難病罹患者に対して、生活指導をわかりやすく説明するための資料としての活用方法の他に、常に座右において生活できるようにするバイブルとしての活用方法が考えられ、日常生活を円滑にするような活用をしてもらうように工夫する。

また、これらの神経難病患者のケアのキーパーソンに対しての生活上の注意を提示できるように活用してもらう。

配布は、各保健所が行うパーキンソン病および脊髄小脳変性症者に対する医療相談での配布、それぞれの患者会での配布があり、年間 80~100 冊程度を見込んでおり、5~6 年程度で使い切る予定である。

### Ⅲ 国際科事業報告

#### 2018 年度の国際科事業の概要

##### 1 韓国仁濟(インジェ)大学校との交流

###### (1) 仁濟大学校から本学への研修

ア 来学者：仁濟大学校物理治療学科 3 年生 2 名（男性）、引率教員 1 名

###### イ 研修概要

①期間：2018 年 6 月 27 日（水）～2018 年 7 月 27 日（金）

②日程：6 月 28 日（木）～7 月 6 日（金）オリエンテーション、病院・施設見学及び学内授業参加  
7 月 9 日（月）～7 月 19 日（木）弘前脳卒中・リハビリテーションセンターで研修  
7 月 20 日（金）～7 月 26 日（木）自習研修、発表準備、研修成果発表、修了式  
7 月 27 日（金）帰国

###### ウ 仁濟大学校の学生の感想

- ①日本の理学療法について様々なことを学ぶことができました。特に、韓国と日本の理学療法におけるアプローチの違いを理解し、訪日前から興味があった分野を楽しく勉強することができました。
- ②青森県立保健大学の学生と学内外で多くの交流ができてよかったです。青森県や日本の文化、簡単な日本語の勉強など最高に面白い体験ができました。
- ③青森県立保健大学の充実した施設、親切な教員や学生、スタッフは非常に良かったです。青森の豊かな自然に囲まれた短い研修の生活は大変良い思い出になりました。



最初日の自己紹介



歓迎会



実習参加



病院研修中

###### (2) 青森県立保健大学から仁濟大学校への研修

ア 行学者：青森県立保健大学理学療法学科 3 年生 2 名（女性）、引率教員 1 名

###### イ 研修概要：

①期間：2018 年 8 月 30 日（金）～2018 年 9 月 14 日（金）

②日程：8 月 31 日（金）～9 月 1 日（土）学校内オリエンテーション・講義参加

- 9月3日（月）～9月5日（水）病院内研修と大学校内国際交流イベント
- 9月6日（木）～9月7日（金）大学校内行事と韓国語・韓国文化を勉強
- 9月11日（火）ソウルへ移動
- 9月12日（水）～9月13日（木）Seoul Community Rehabilitation Center や関連施設見学
- 9月14日（金）帰国

ウ 本学学生の感想

- ①日本ではあまり経験できない理学療法（プールエクササイズなど）について学ぶことができ、韓国の病院と理学療法について楽しく勉強することができました。
- ②今年と昨年、青森県立保健大学に来た学生と学内外の交流ができましたので、とても良い経験になりました。
- ③大学校や病院の研修はもちろんですが、仁濟大学校の学生と交流しながら、韓国文化や韓国の若者の日常生活についてたくさん学んで良かったです。



韓国文化・朝鮮服の体験



歓迎会

(担当者：理学療法学科 マイケル スミス)

2 ベレノバ大学との交流

(1) ベレノバ大学から本学への研修

実施状況

2018年5月15日(火)～19日(土)までの5日間、米国ペンシルバニア州のベレノバ大学(Villanova Univ.)から、8名の看護コースの研修生と2名の教員が来青し、学生や教員と交流を持ちながら、日本の看護教育や地域医療、日本の文化について学んだ。

今年度は両大学の学生間の交流を促進させる目的で、看護の専門授業や英語の授業、人間総合科学演習ゼミなど、幅広い分野の授業参加を企画し、今までになく多くの学生達と交流を深めることが出来た。

ア 研修内容

日時	時間	行程
5/15 (火)	13:58 新青森駅着	お迎え
	14:40	入寮オリエンテーション
	19:30～21:30	歓迎会
5/16 (水)	9:00	学長表敬訪問
	9:10～10:10	キャンパスツアー
	10:20～11:30	学内授業参加「人間総合科学演習」
	11:30～12:40	学生との交流ランチ



	13:00～13:50	看護学科 FD テーマ：ヘルスリテラシー向上を目指して
	14:00～14:50	学内講義 1「日本の医療保険制度」 (鄭先生)
	15:00～15:50	学内講義 2「日本の看護基礎教育」 (藤本先生)
	16:00～17:30	学内授業参加「English 1」
5/17 (木)	10:00～11:50	杖なし会 参加・交流
	13:00～16:00	青森県立中央病院 見学
5/18 (金)	9:00～15:00	浅虫ヘルスプログラム活動視察
	15:30～15:50	看護マネジメント実習学内発表会見学
	16:30	退寮説明会
	18:30～20:30	お別れ会 (教員)
	19:30～21:30	お別れ会 (学生)
5/19 (土)	7:40	大学出発

#### イ 交流事業報告書

「交流事業報告書 青森県立保健大学・ベレノバ大学 2018」を作成した。報告書は研修内容の詳細、交流に参加した本学の学生やベレノバ大学研修生らの生の声を載せた内容となっている。詳細は報告書をごらん頂きたい。



ドクターヘリの見学



ベレノバ大学研修生による  
プレゼンテーション



「杖なし会」の皆さんと記念撮影

(担当者：看護学科 田中栄利子)

## (2) 本学からベレノバ大学への研修

2018年は、院生を対象としてベレノバ大学で海外看護研修をスタートさせました。博士前期課程の2名が9月に3日間の研修を受けに行きました。本研修はアメリカの看護教育や看護実践を学びながら国際的な視野を広げることを目的とし、病院見学や大学院の授業参加、院生同士の交流などのプログラムが計画され実施されたものです。今後の両大学のさらなる交流が期待されています。

### ア 研修先

Villanova 大学 (アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィア)

### イ 研修期間

2018年9月25日～2018年9月27日 (3日間)

### ウ 研修のねらい

- ・海外の医療現場を視し、国際的な視野を身につける
- ・アメリカの看護教育における教育内容、方法、人材育成の特徴について学ぶ
- ・看護管理における日本との違いを学ぶ
- ・アメリカでの医療の現状、看護師の役割を学ぶ

### エ 研修内容

1日目 (9月25日)	
9:00	Villanova 大学の施設見学 ボランティアの大学生が学内の施設や環境等を案内。図書館やチャペルなどを見学。
11:00	シミュレーションラボ見学 看護学科のシミュレーションラボを見学し、シミュレーターや設備を見学。看護基礎教育について意見交換。
12:30	ランチ 大学院生と意見交換をしながらランチ。
13:30	ディスカッション ヘルスケアやマネジメントについて教員と意見交換。
15:00	対話 教員数名と対話。
16:30	Unity クリニックの見学 Nurse Practitioner が診療を行っている施設を見学。
17:30	研修終了
2日目 (9月26日)	
8:00	Lankenau 病院の院内研究発表会に参加 院内研究発表会に参加、聴講。
12:00	ランチ 看護研究に関する意見交換をしながらランチ
13:00	Lankenau 病院の施設見学 病棟やICUなどの施設を見学、その後意見交換。
15:00	Villanova 大学のショップ等の見学 大学グッズを販売しているショップ等を見学。
16:30	Villanova 大学で大学院の授業へ参加 看護教育の授業に参加し、聴講。
18:00	交流会

	大学院生が歓迎会をしてくれた。軽食を取りながら意見交換。
19:00	研修終了
3日目	(9月27日)
9:00	フィラデルフィア小児病院の見学 オリエンテーションをしてもらいながら、病棟やシミュレーションラボ等を見学。その後、NP (ナースプラクティショナー) と意見交換。
11:00	ランチ
12:00	ペンシルベニア大学病院の見学 病棟、透析室、ヘリポート等の施設を見学し、オリエンテーションを受けた。
15:00	薬局、NP クリニックの見学 スーパーの中に設置してある薬局や、ドラッグストアの中に設置してある NP クリニック等を見学。
18:00	ホームパーティ 教員の自宅でのホームパーティに参加し、教員や大学生と交流をしながらディナー。
20:00	研修終了



#### オ 院生の感想（研修での学び）

アメリカでは大学や病院、家族指導においてもシミュレーション教育を積極的に行っており、実践に近い学習環境が整えられていた。また、それをサポートする人材が充実していた。地域においては、Nurse Practitioner が経済的に苦しい人や移民などに対しても医療を提供していた。また、病院施設においてもあらゆるニーズに理解を示し看護を提供しており、高度実践看護の実際を見学とディスカッションを通して学んだ。アメリカではさまざまな人種、宗教、文化を尊重しており、大学構内、病院施設、職場環境においても多様性を重視していることを感じる場面が多くあった。今後私たちが看護を提供していく中で、あらゆる人種、宗教、文化に対しその人らしい生き方、暮らしに寄り添っていくことの大切さを改めて考える機会となった。







(担当者：国際科長 川内規会)

### 3 ナムディン看護大学との交流

#### (1) 学術・教育交流協定締結の趣旨と経緯

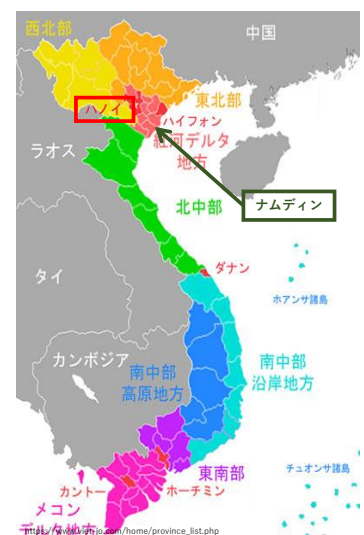
青森県立保健大学では、公立大学法人の第2期中期計画において、「海外教育機関との国際交流の推進」を掲げ、「交流協定を締結している海外の大学と国際交流を推進するとともに、新たにアジア地域の大学との交流拡大を図る。また、協定を締結している大学との連携により、公開講座、講演会等を通じて県民の健康と生活向上のための情報提供を行う」としている。このような中、本学では国際交流が可能なアジアの大学等を検討し、国立ナムディン看護大との連携について具体的に検討が開始された。そして、平成30年度計画において「栄養学科との新しい交流を目指し、情報を収集するとともに、ベトナムナムディン看護大学との間で、学生及び教員の国際的交流の可能性を検討する」ことが盛り込まれ、ナムディン看護大学等関係大学とも検討を重ねた結果、この度、新入生の入学式の時期に合わせて、学術・教育交流協定の締結を実施した。

期間：2018年9月22日（土）～9月24日（月）

#### (2) ナムディン市ナムディン看護大学の概要

ナムディン看護大学は、ベトナム共和国の首都ハノイより約100km南に位置するナムディン省の省都ナムディン市の市街地にある1960年に創立された看護師養成学校を母体に、2004年に設立された国立大学である。新設された栄養学科には2018年に17名（うち男性3名）が入学している。ベトナムでは、4年制大学の栄養学科を卒業した者を「栄養士」とする制度がまだできたばかりで、法整備もまだ十分にはなされていない。しかしながら、経済的に発展をする中で人々の健康問題が栄養と密接にかかわっており、人の健康に食と栄養の部分からかかわる栄養の専門家を育成することの重要性は高まっている。

ナムディン看護大学の構内には、大学の教室や事務局の入ったメインの建物のほか、講堂、1,200人を収容可能な学生寮、大学院生寮のほか、食堂、図書館、テニス



コートなどが設置されており、現在は、実習も可能な大学病院を敷地内に建設中であった。

また、大学構内には、プライベートの会社ではあるが、ハノイに本校がある日本語学校の教室もあり、日本語を学びたい学生は、授業料を支払って学ぶこともできるということであった。

大学には、国際交流を担当する職員の中に、日本語を話すことができる職員もおり、日本の学生が訪れても交流がスムーズにすすむのではないかとと思われる。



### (3) 式典～これからの交流に向けて

調印式当日には、保健省から Dr. Hoang Van Thanh 氏、ナムディン看護大学学長 Le Thanh Tung 氏、副学長 Ngo Huy Hoang 氏、国立栄養研究所所長 Prof. Tuyen 氏ほか、栄養学科長、国際交流担当の教職員当職員などの大学関係者のほか、栄養学科新生とその保護者も参加して式典が開催された。

式典では、参列者からのスピーチの後、ベトナム側のナムディン看護大学、ベトナム国立栄養研究所と日本側の本学と十文字学園女子大学それぞれが交流協定の調印を行った。

式典の後には、十文字学園女子大学山本茂教授、本学吉池信男教授より新生たちに向けた講義が行われた。新生たちは非常に熱心に身を乗り出すように講義を聴講し、また、質疑応答においては、日本の大学との交流についての具体的な内容を各教授に質問し関心の高さがうかがえた。

ナムディン看護大学の栄養学科はまだ始まったばかりであるが、志を持ち、また、国際学術・教育交流に意欲的な学生と、それをサポートする大学教員、ベトナム国立栄養研究所の教授陣と交流することができたことは、今回の成果であったと考える。

ベトナム、ナムディン看護大学との学術・教育交流協定が結ばれたことにより、ベトナムの学生や教員のみならず、日本側からの国際交流を希望する学生や教員にとっても新しい展望の見える交流の第一歩が記され、これからの発展が期待される。



青森県立保健大学、ナムディン看護大学、ベトナム国立栄養研究所との調印式



新生(17名参加うち男子3名)と先生方

(担当者：栄養学科 鹿内彩子)



#### 4 国際科講演会

- (1) 日 時：2018年10月27日 13:30~15:00
- (2) 会 場：青森県立保健大学 A棟111講義室
- (3) テーマ：「和食はどこからきたのか？—伝来して定着した農産物と調理—」
- (4) 講 師：①小川聖子氏：神奈川県出身／料理研究家・食文化研究家 聖徳大学准教授／女子栄養大学・人間総合科学大学非常勤講師博士（学術）／食文化論専門  
現在日本に残っている伝統食材と、その調理法、地域文化について、研究。また、科学的理論に基づいた料理を、一般家庭に広めるべく、調理関係の仕事に携わってきた。著作『女子栄養大学の50からのいたわりレシピ』『食と健康の科学』（共著）など多数。
- (5) 講演内容：食文化論がご専門で料理研究家でもある講師をお招きして、ユネスコの無形文化遺産として登録されている「和食」について、その食材の中でも野菜や果物は、日本固有のものはほとんどなく海外から入ってきて根付いたものが多いこと、調理法も、古代から海外の影響を受けていることなど「食」の観点から、海外とのつながりをお話いただきました。講演が終わった後も残り、発表者に質問をしていた人もいました。アンケートにもたくさん感想が寄せられました。今回の講演での発表者の内容に参加者も大変関心を持ってくれたと思われます。
- (6) 参加者：58名
- (7) 参加者のアンケートより：
- ・主に野菜についての学びを深めることができ、また、和食に対する意識が変わりました。
  - ・普段知ることができない食文化について、詳しく知ることができたことや、外国と日本のつながりを、食べ物を通して考えることができ、満足でした。
  - ・日本の伝統食や農作物を伝承していくためには何をすればよいか考える良い機会でした。
  - ・和食という言葉を経験場面で使ってきましたが、明治時代に洋食が入ってきたことからということを知り、非常に驚きました。このように普段何気なく使っている食べ物の起源を学ぶということが、今回の講演を通してとても面白いと感じました。
  - ・野菜や料理の種類や原点などが知られて面白かった、言葉も期限を含めて、今後料理をする時、買うときの関心が高まった。

(担当者：栄養学科 鹿内 彩子)

#### 5 学生ボランティア活動

##### (1) ベレノバ大学研修生との交流

ベレノバ大学より研修生8名および引率教員2名を受け入れる（研修期間：5月15日～5月19日）ための準備から受け入れの実際まで、22名の学生がボランティアとして自主的に応募した。国際科委員や看護学科教員と連携のもとに学生が関わるイベントの企画運営を以下のとおり行った。

##### ①研修生の受入れ準備

22名の学生を対象にオリエンテーションを行い、事前に8名の研修生と親睦を深めるためのPen palを募り、2月～5月までの間にメール交換を行った。また、学生が中心となり企画をする内容の検討を開始した。その内容は、歓迎会やランチ交流会、キャンパスツアー、お別れ会と多岐に及び、各学

生が役割分担をしながら準備を進めることができた。

## ②歓迎会

5月15日19時30分より道頓堀において学生19名と本学教員6名が参加し、歓迎会を開催した。Pen palとして交流をしていた学生同士が同じテーブルを囲みながら、ボランティア学生は自己紹介や学生生活などについて事前に英会話の準備をして臨み、研修生も一生懸命話を聞いてくれたことに感謝の言葉を述べるなど、終始、和気あいあいとした雰囲気であったという間の2時間30分を過ごした。

## ③キャンパスツアー

5月16日9時30分より、学生4名が企画したツアーを開催した。栄養学科の紹介では、給食経営管理実習室での大型鍋やしゃもじ、エアシャワーに研修生も興味津々の様子であった。看護学科の紹介では、シミュレーション・ラボで学ぶことの説明や妊婦体験モデルを実際に着用する場面で、活発な意見交換がみられた。

## ④ランチ交流会

5月16日11時30分より交流センターにおいて、学生18名が参加した。食券販売機で食券を買い求めるためのお金の準備やメニューの説明に苦慮しながらも一生懸命に対応する姿勢に研修生や教員は感謝していた。その後、研修生および教員に本学オリジナルTシャツをプレゼントし、ランチをしながらの交流を深める場となった。

## ⑤お別れ会

5月18日夜に研修生8名と学生16名のみで近隣の居酒屋で開催した。ボランティア学生が事前に準備していた手紙とプレゼントを贈りながら、出会いへの感謝と別れの寂しさを共に感じ、再会を誓い合った。

学生は自分自身の英語力向上や海外で暮らす人々と交流してみたいなど、それぞれの動機をもとに主体的に活動していた。今回の経験を通じ、自分自身の欠点であった積極性を克服できた、自分に自信を持つことができたと評価した学生もみられ、有意義な経験であったのではないかとと思われる。



歓迎会（お好み焼きを焼きながら）



キャンパスツアー開始



キャンパスツアー（ねぶたの花笠紹介）



キャンパスツアー（妊婦体験モデル着用）

（担当者：看護学科 千葉武揚）

## 6 国際交流講座

《開催日》 2018年10月6日（土）、10月7日（日）本学大学祭において実施

《場 所》 青森県立保健大学B棟1階 講義室B4(B109)

《テーマ》 『もっと知ろう！見つめなおそう！私たちの「食」』

《内 容》 ①青森県立保健大学栄養学科教員の活動紹介

②食に関する展示物・各国のお菓子提供

③上映会

④青年海外協力隊(JICA)活動報告・資料展示

《共 催》 独立行政法人 国際協力機構東北支部(JICA 東北)

《来場者数》 165名（アンケート回収数より）

《アンケート結果の抜粋》

- ・アンケート回答者の背景は、男性52名(31.5%)、女性113名(68.5%)であり、年代別では19～29歳が50名(30.3%)と最も多かった。
- ・世界の食糧事情や国際協力への理解を問う設問では、「とても深まった」37名(22.4%)、「やや深まった」108名(65.5%)、「どちらともいえない」16名(9.7%)、「よくわからなかった」2名(1.2%)、「わからなかった」1名(0.6%)であった。また、このようなイベントがあった方がよいかを問う設問では、「あった方がよい」157名(95.2%)であった。
- ・イベントが自身の食事を見直すきっかけとなったかを問う設問では、「なった」105名(63.6%)、「ならなかった」6名(3.6%)、「どちらともいえない」54名(32.7%)であった。自由記載からは「食材の無駄をなくしたい」、「食糧のありがたみを知った」、「子どもへの食育に一役かっていた」などの感想がみられた。
- ・はじめての試みであった外国のお菓子提供は、大変好評であったが含有するアレルギー物質について事前確認をする必要性を感じた。次年度以降の課題として、自由記載より開催プログラムの周知方法（パンフレットを配布する、上映会のアナウンスをする）を工夫することで、より多くの方に来場してもらおうことができると考える。



世界の食糧事情展示に興味津々



世界で活躍する日本人の紹介(JICA 提供)

(担当者：看護学科 千葉武揚)

## 7 英語教員の地域交流

### (1) イングリッシュ・カフェ

English Café was held on August 5<sup>th</sup> during the annual Open Campus at Aomori University of Health and Welfare. The café provides prospective students with a chance to meet the English teachers and experience communicating in English as they would in the classroom. English teachers chatted with students from various Junior and Senior



high schools about their hobbies, family, school and other topics of interest to them. Drinks and snacks were served to create a relaxed café-style experience. We welcomed a mix of both boys and girls and this year we also had quite a number of parents joining us. Participants sat in small groups, which gave them a chance to, not only answer questions, but also to ask questions to the teachers. Students are often shy when they first join us but quickly relax and always seem to enjoy the experience. We look forward to welcoming students again next year.



(担当者: 栄養学科 Mellisa Ogasawara )

## (2) 小学生対象国際文化交流

外国の子どもたちが遊んでいるゲームを体験し、海外の文化に触れることを目的として、2018年7月27日(金)に2回目の小学生対象国際文化交流を本学の体育館で行いました。24名の小学生が参加し、本学の外国人教員と英語による交流を行いました。2時間の中で5つの外国のゲーム(エッグスプーンレース、キックベースボール、トンネルボール、アルティメットフリスビー、氷おに)を体験するもので、氷おにとアルティメットフリスビーがとても盛り上がり、子どもたちの間で人気の高いゲームとなりました。ゲームの他に「オレンジ休憩」の体験もありました。オレンジ休憩というのは、オーストラリアにおいて、子どものスポーツイベントで休憩を取るときにオレンジを食べる習慣のことです。30個のオレンジがあつという間になりました。

参加した小学生全員が「とても楽しかった」、「また参加したい」と答えていました。

アンケートに答えた小学生の主なコメントは以下のとおりです。

- ・外国の遊びや習慣が体験できて、とても楽しかったです。
- ・外国の遊びがとても楽しかった。中でもフリスビーやエッグスプーンレースがとても楽しかったです。
- ・英語で話していたので不安だったけど、実際にやってくれてよくわかり、楽しく遊べてよかったです。また参加したいです。
- ・2回目の参加で、外国のゲームがとても楽しかったです。フリスビーでは、グループの人と協力しあっていたので、来年も参加したいです。

また、参加した小学生の保護者のアンケートには以下のコメントがありました。

- ・外国人の先生方と触れ合う機会がないので、いい機会だと思います。
- ・外国人の先生と遊びを通して英語にも触れることができ、また異文化も学べて大変有意義な時間を過ごすことができました。
- ・ネイティブの先生と交流する機会は子どもにとってよい刺激になりますし、また学年卒を越えた遊びの経験はとても貴重な思い出になり、他国の文化も知ることができます。
- ・ブレイクタイムのオレンジはとてもよかったですし、おいしかったです。いろんな文化や習慣を知るよい機会でした。
- ・身体を動かして知らないお友達とっしょに遊ぶのはとてもいい経験だと思います。ネイティブの人たちと触れ合うこともあまりないことなので今後も続けてほしいです。どうもありがとうございました。



(キックベースボールの様子)



(トンネルボールの説明)

(担当者: 栄養学科 Mellisa Ogasawara )

## IV 社会福祉研修実績

### 総括表

研修名	開催日程	研修日数	定員	受講者数	会場
		日	人	人	
社会福祉行政新任職員研修	4/26	1	60	15	青森県立保健大学
老人福祉施設新任職員研修	5/10	1	140	89	青森県立保健大学
新任保育士・保育教諭研修	5/17	1	160	137	青森県立保健大学
障害児・者福祉施設新任職員研修	5/22	1	160	179	青森県立保健大学
社会福祉施設職員経理研修（児童福祉施設）	6/27	1	100	58	青森県立保健大学
社会福祉施設職員経理研修（児童福祉施設以外）	6/28	1	130	90	青森県立保健大学
栄養・食育マネジメントセミナーⅠ（児童福祉施設）	7/6	1	150	126	青森県立保健大学
保育所セミナー	7/10	1	80	79	青森県立保健大学
栄養・食育マネジメントセミナーⅡ（児童福祉施設以外）	7/20	1	150	99	青森県立保健大学
社会福祉施設職場研修担当者研修	8/21～8/22	2	40	35	青森県立保健大学
社会福祉施設中堅・指導的職員研修	8/23、8/27～8/28	3	30	44	青森県立保健大学
生活保護従事職員・査察指導員研修	9/4	1	30	12	青森県立保健大学
社会福祉施設看護職員研修	9/12	1	150	92	青森県立保健大学
子ども・家庭福祉担当職員セミナー	9/21	1	60	29	青森県立保健大学
高齢者支援セミナー	10/2または10/12	1	各30	20、15	青森県立保健大学
新任保育士・保育教諭フォローアップ研修	10/11	1	160	83	青森県立保健大学
障害児・者支援セミナー	10/16	1	80	95	青森県立保健大学
社会福祉トップセミナー	10/27	1	200	71	青森県立保健大学
社会福祉援助技術研修	11/2または11/8	1	各30	28、25	青森県立保健大学
カウンセリング研修（初級Ⅰ）	11/15	1	60	47	青森県立保健大学
カウンセリング研修（初級Ⅱ）	11/16	1	30	35	青森県立保健大学
セーフティネットフォーラム	1/17	1	100	68	青森県立保健大学
社会福祉主事資格認定講習会	5/21～11/22 （実習6日間含む）	54	60	42	青森県立保健大学 他

## V 平成30年度公開講座実績

基本テーマ：生活と健康

年度テーマ：健康とともに20年～未来につなぐ地域の健康～

回	月	日	曜	講師	職名	講演テーマ	参加者/年間					
1	5	26	土	福岡 裕美子	看護学科 教授	認知症の理解 －自分のために知りたい基礎知識と対応－	354	1,302				
				工藤 英明	社会福祉学 科 准教授	認知症の人を支える人と地域づくり						
2	6 ※	9 新	土 町	漆畑 俊哉	理学療法学 科 講師	足と健康について考える	266		1,302			
				山田 伸	社会福祉学 科 助教	アルコール健康障害対策 －アルコール依存症について－						
3	6 ※	23 下	土 北	岩月 宏泰	理学療法学 科 教授	貯筋でGO！シニアに必要な筋力を考える	79			1,302		
				小山 達也	栄養学科 助手	果物と健康 －栄養疫学的観点から－						
4	7	7	土	大西 基喜	看護学科 特任教授	健康寿命とヘルスリテラシー	335				1,302	
				大野 智子	栄養学科 准教授	ライフステージにおける食事と栄養 －ヘルスリテラシー向上を目指して－						
5	7	21	土	飯島 美夏	栄養学科 教授	りんごに含まれる「ペクチン」の科学	268					1,302
				小林 昭子	看護学科 助教	大切な人達が健やかに暮らしていくために －生活にアロマテラピーを取り入れて－						